

「揚卷助六」心中の系統

——『大阪すけ六心中物語』について——

『大阪助六心中物語』といふ古版の繪入細字淨瑠璃一卷を熟讀した。この淨瑠璃本は、未だ學界に紹介されてゐない珍しい版本である。傳本の少いこの一書を遇々寓目して「揚卷助六」の心中物語系統に、何等の解決を與へ得ないまでも、新しき一資料を提供する事が出來ると思ふので、この稀觀淨瑠璃について述べてみる。

『大阪助六心中物語』は、どこが珍しいか？ といふと、

一、表紙裏に「しんはんすけ六みちゆき 都太夫一中ぶし」——とあつて、從來一中の助六心中で知られたる「ぜひなけれ、佛もゝとは凡夫にて」の書起し道行の一文が「さらし繩手に三重つき給ふ」までを載せてある。

二、そして本文には、「心中みちゆき」が別にあつて「うすゞみにかい暮れそめて行く道の」といふ別のが儼存する。

三、「助六心中」の淨瑠璃として傳つてゐるのでは、助六も揚卷も相對死は遂げてゐないが、この『大阪助六心中物語』は、大阪の千日寺で相對死を遂げてゐる。

四、表紙題簽の上欄に、男、女と書し、その紋所が掲げてあるのは、實説に據る處あるかを想はしむる。

五、一段物に道行が付いてゐるだけのもの、熟讀して受ける感じが、相當古い淨瑠璃の形式である。

などである。まづこの繪入淨瑠璃の形式から述べておく。

一、半紙本八丁。表紙裏は、右にいふ一中ぶしの道行處載。裏表紙には本文半丁あり。メめて半紙九丁也。

二、十二行と十三行と混淆、概して裏丁が十二行、表丁が十三行。

三、奥付は「二條通寺町西へ入町北側、正本屋九兵衛新板」

四、表紙は、題簽に「すけ六心中」とあり、傍書きに「新板大あたり上るり」(右)「付りけいせいあげまき戀路のかぐみ」(左)とある。

五、三丁から始つて、「大阪すけ六心中物語太夫正本」といふ内名題があるが「太夫正本」だけで、何人の正本か不明。

六、挿繪は見開きニヶ所、上下に區劃あり、都合六ヶ所の繪面となる。

七、文章は『助六心中』とも『蟬のぬけがら』とも違つてゐる。が、筋は道行以外は同じ。即ち道行で相對死を遂げてゐるのが相違點。

などがこの心中物語の特異點である。ところで茲では便宜のために「揚卷助六」の物語系統について、從來世間に發表されたものを、集約して掲げてみる。そしてこの『大阪助六心中物語』がこの系統に何等かの結論を與へることが出来れば、或は一資料を寄與することが出来れば、もつきの幸である。

一、助六心中淨瑠璃の明確に年代の出てるのは、明和五年版『外題年鑑』の寶永六年三月三日「今川制詞條目」切に「上卷助六千日寺心中」竹本座が最古だが、これは怪しい。この以前に都太夫一中の淨瑠璃のある事明確。但し年代不詳。

二、芝居狂言の方を見ると、寶永三年十一月、京早雲座「助六心中紙子姿」作者安達三郎左衛門、助六（甚左衛門）揚屋八兵衛（福田團右衛門）——（青々團氏『京坂歌舞伎年代記』）
三、大阪では片岡仁左衛門座で寶永四年正月「京助六心中」を演じた。助六（杉山平八）揚卷（淺尾十次郎）この時都太夫一中の淨瑠璃で道行を演じた。（寶永四年三月板『役者友吟味』）
四、初代一中の語り物として「助六心中」は有名なるものだが、傳本が少い。

「助六心中せみのぬけがら」享保丙午十一年正月吉日 あさくさみつけまへどうぼう丁いづみやごん四郎板元

これは「都太夫一中直之正本寫し」とある江戸版である。異本としては、

「蟬のぬけがら」京、山本九兵衛板

の二種ある事が従来とも知られてゐた。前者は六段に仕立替へて、各段の末尾に加筆して江戸向淨瑠璃にしてある。六段ものであるのが特長、後者は二段もので、その上に道行が付いて三段に切つてある。「蟬のぬけがら」の方は道行に特に「大阪萬屋介六道行」とあるが、この廓の事だか本文にはない、前掲『役者友吟味』に「京の助六心中」とわざ／＼、片岡仁左衛門座の狂言が斷つてあり、「蟬のぬけがら」にわざ／＼「大阪」と斷つてゐるから、これは大阪の廓——新町であらう？ 尤も「大阪助六道行」でも女の詞に「そもマアわしが氏神は、どうしたぐちの神さまぞ、京のよし田の神帳に」とあるから曖昧ではある。江戸版の五段目が道行になつてゐて、「蟬のぬけがら」と文句は同じである。

五、これら一中正本の「助六心中」の年代が不明である。然し寶永七年九月版の『松の落葉』卷二に、此道行が収録してゐるから、寶永七年以前の作、所演である事は明かである。江戸の享保版はあと版改訂本である事も明かである。

六、『脚色餘録』にある「(大阪新町で)天職にて心中せしは榎屋揚卷萬屋助六なり、千日寺心

中とて寶永六年の事也」とあれど、こは心中のあつた年でなく、前に述べた『外題年鑑』に謂ふ。「千日寺心中」上演の年であらう。

七、立川馮馬は『歌舞伎年代記』に「萬屋助六心中の淨るりは、延寶六戊午年、大阪山本土佐掾座にて、都太夫一中語始」とあるが、この土佐掾座は角太夫の小屋で、これは事實であらうが、延寶六年が怪しい。この延寶時代における他流の淨瑠璃を比較しても、助六心中といふこの眞世話狂言が語られたとは思へない。眞世話ものが出るには早すぎる。

八、「助六心中」と「梶久末松山」が得意でもあり、有名でもあつた初代都太夫一中は、いつ年代の人？ 一中は、山本角太夫の門人、一中節の創始者、元祿、寶永に京で榮えた一流である。一中は京本願寺派明福寺の第三世周意の子惠俊と言つた。性來音曲好きの放埒者で、二十一歳で還俗した、都越後目、即ち後の都萬太夫の門に入りて一流を起した。正徳五年十一月江戸に下つて市村座で「笠物狂」や「山めぐり」を語つて江戸の人氣を博してゐる。また正徳二年江戸に下り二代目市川團十郎に「助六心中」を聴かしてゐる。（『名人忌辰録』）この時、一中から「揚卷助六心中」を聴いて團十郎が、花川戸助六の名に因んで、あの歌舞伎十八番の助六狂言を創作した、江戸の狂言として全く創作したことはいふまでもない。上方（京

にしる大阪にしる)系統の「助六」が一中によつて江戸入をして市川流の「助六」となつた。一つは伊左衛門系統の「助六」であり、一つは江戸の市川流の「助六」となつたことに興味が多い。江戸「助六」が始めての正徳三年四月五日よりの木挽町山村座の「助六」が、上方の系統である事は、「近世奇跡考」の近藤助五郎描く、正徳三年の繪本の文句が一中の助六道行である事、『役者助六囃』(天明二年寅六月版)によつても明かである。

九、『助六心中』(享保十一年江戸版)の六段目を見ると全く、この段は後に書加へたものである事が明かで、揚屋八左衛門に助六揚巻が助けられ、その後「都大夫一中が此ころあやつりにしかけ中候」と八左衛門をして口上を言はしめて、自分達が夫婦で、揚巻助六時代の道行淨瑠璃を一中で聴くといふ趣向。「のろま人形を遣ひつゝ」といふ座敷淨瑠璃の態になつてゐる。この挿畫を見ると助六の詞書に「あれ一中がおのしとおれとそのまゝにかたるは、大かた近松のさくじやろ」とあるのに見ても、又『助六心中』を熟讀しても近松の作たるに疑ひがない。

十、一中の淨瑠璃が至極流行つたものと見えて、「助六後日おかた成」といふ一中の正本の傳本がある。(『歌舞伎研究』第廿七號、水谷不倒氏發表)これは八行本二十五枚半の作。揚巻が

「おかた」(妻女)に成るといふ間際に意外にも、助六の許嫁から破綻が出来た、そして助六は二度の紙子姿になるといふ一曲、作者は佐渡島三郎左衛門、時代は正徳年間の上演? といふ事である。

これだけが、今日まで助六系統について知られたる事實である。これに私がこゝに掲げた『大坂助六心中物語』をどういふ位置におくべきかといふ前に、もう一つ前島春三氏が『演藝月刊』第十七輯に發表された「大坂千日寺心中物語」について付加へておかねばならぬ。前島氏の「千日寺心中物語」は私は見た事がない。只『演藝月刊』誌上で前島氏が「蟬のぬけがら」の文句と五ヶ所の相異點を任意摘出して掲げられたが、それを抄出すると、

一、「大坂千日寺心中物語」と「蟬のぬけがら」とは大體の筋が同一、唯文句が改竄され、一つが一つに改作されたといふだけである事。

二、「千日寺心中」が、竹本内匠利太夫正本で、京山本九兵衛刊行である事。

三、微細の點まで筋は一致してゐるが、道行の文句が全然違つてゐる事。

四、「千日寺心中」は一段ものに道行が付いてゐるといふ形式である事。

五、前島氏が「千日寺心中」を熟讀して、世話淨瑠璃の最も早いものゝ一つであることに疑ふ

餘地がない事。

を言はれてゐる。

問題はこゝにある。前島氏のいふ「千日寺心中物語」が、どんな正本であつたか、前記の事實だけしか私は知らないから、確かにさうだとはいへないが、私がこゝに發見の『大阪助六心中』は、前島氏が任意に「蟬のぬげがら」と比較された點から推測して私の發見したのは「千日寺心中」と同板でないかと思ふ、唯、書名のみが變つたものではないかと思はれる。そして「千日寺心中」は竹本内匠利太夫正本とあるといふ。『大阪助六心中』には唯「太夫正本」とのみで太夫名を逸してゐるが、表紙裏の一中節の道行を掲げた點から見ても一中正本でない事だけは明かである。

『大阪助六心中物語』の書起しからが異つてゐる。この書にはかうある。――

擬も其後こうくはのはるのあした。こうさんしうの山よそほひをなすと見へしもゆふべの風にさそはれ
こうえふの秋のゆふべくはうこうけつのはやし色をふくむといへ共あしたのしもにうつらふ松風らげ
つ……

と續いて、「蟬のぬげがら」の書起しである「松風らげつ……」につゞくのである。その他の文句は隨所にちよいちよい違つてゐる。そして全く違ふ道行を左に掲げておかう。が、「千日寺心中」

とは道行の書起しが同じだが、全體を私は知らないが同じではあるまいか？

心中みちゆき

うすぢみにかいくれ、そめてゆくみちの、かねふたつ、みつ世のなかの、かぎりも、今とおもふにぞいとど、なみだのとどまらず、すゝりなきする、こゑきけど、見かはすかはは、おぼろにて、手をとりかはしゆくきはこれくこゝに四つばしの、くもでにものおもへとや、ながれのうき身をそのまゝにすくはせたまへなまいだ、なむあみだくくく、むじやうのかねもちかづけば、もはやさいごかさらばへ、さらばさらばくも、くどくどと、くりかへしつゝゆくすがた、ひとや見るらんこなたへと、そでとくくにいれかはし、こんどのく、とつとこんごのそのさきの世も、かならずめをととよろこびで、さぎにすゝめばすけろくも、なみだいやますばかりなり、なにはのてらのむめがゝは、むかしのいろにをとらじと、さくやこのはなゆふごもり、いまをはるべとさくやこのはな、四季おりくくのときもかはりぬ世のなかの、こよひわかれてわれくは、またいつの世にむまれきて、いつかあの世のこのうちしめてぬる夜のむつごとも、はやありあけのとりのこゑ、なくくむかふにきつのごと、見はらすゝゑはにしのおみずいゑんしんによのなみのをとたゝぬ、目もなしくなみのたちあもなにゆへぞ、かりのうき世のかりまくら、さめてのゝちのうつゝぞとおもひ、しれどもさとりゑぬりんゑのくるまくるくくと身のあだしのに、つきにけるをやこもんあげやのていしゆ、たづねくてせんちぢでらの、にはの

あさあげ夜あけのからすかはひくとなく、こゑあげまきやすけろくしんぢうしるもしらぬをしなべ
てみなねんぶつをぞとなへける。

とある。かう助六系統の事實だけを並べると、この『大阪助六心中物語』は、前島氏の「千日寺
心中」について言はれたる如く、世話浄瑠璃の最も早い時代の一作で、人形浄瑠璃史上重要な
一位置を位めるものである事は、この作風からしてみても、斷言して憚るまいと思ふ。

もう一つこの『大阪助六心中物語』について注意すべき事は、文字傍の節章が一中のでない事
は勿論、正しく相當節が複雑になつた竹本流の節章である。前島氏の「千日寺心中」が竹本内匠
利太夫正本の由であるが、「内匠利太夫」については、後の大和掾の父である事の外「千日寺心中」
については、私の手の届くかぎりを調べてみても、遂に徒勞に終つたが「大阪助六……」の節章か
ら見ても竹本流に誤りはないとすると、「千日寺……」と「大阪助六……」とは何れが先後かは知
らぬが、一つが改題ものではあるまいか？

そして『大阪助六心中』は、大阪新町の遊女である事は、道行に「こゝに四ツ橋のくもでも
のを思へてや」及び「たづねくゝて千日寺の庭のあさ……」でも判るし、挿繪に千日寺の火屋の
あるのを見ても明かである。

私に以上の事實を綜合して想像を逞うする事を許さるるならば、左の如き系統を淨瑠璃の「助六」は持つのではあるまいか？

「助六揚卷」心中系統

江戸 (花館愛護櫻) 江戸半太夫 正徳三年

江戸 助六心中 改訂者不詳 都太夫 享保十一年 正徳三年

江戸 和泉屋權四郎板

京(?) 助六心中 近松門左衛門作 都太夫 中正本 延寶六年(?)

大阪 蠅のぬけがら

近松門左衛門作訂正 助六 後日 傾城をかた成 衛門作 正徳年間(?) 佐渡島三郎左

△「大阪千日寺心中物語」 近松門左衛門作(?) 竹本内匠利太夫 正徳十年(?) 京都山本九兵衛板

「大阪千日寺心中物語」の改題 竹本・豊竹(?) 正徳 寶永三年(?) 京都山本九兵衛版

△「夕霧阿波鳴渡」 近松門左衛門作 竹本座 正徳元年

浪花文章夕霧塚 豊竹座 寶曆元年 「夕霧阿波鳴渡」の改作

上卷 助六千日寺心中 明和版 外題 竹本座 所載 寶永六年

「萬屋助六二代稀」 並木丈助作 豊竹座 享保二十年

「紙子仕立兩面鏡」 菅專助作 北瀬江座 豊竹派 明和五年

附記 この原稿を書終つたのちに心付いたのであるが、前記の表紙裏の

▲しんはんすけ六みちゆき

都太夫一中ぶし

といふ半丁は、この『大阪助六心中物語』の最初からあつたのでなく、舊藏者が、何かに右の如く、本文と違つた「助六道行」を見出したので、参考に、表紙裏に貼付けておいたものではあるまいかといふ疑ひが生じた。——何故ならば本文の柱をよくく見ると鼻毛に「けいせい心中」とあり、一中の道行の半丁の鼻毛は位置の違つた、ずつと下の方に「都太夫□□□」とある、或は當時の「道行揃ひ」といつたやうなものゝ内から同じ「助六」道行を好事者が貼つけたと見れば見らるゝのである。——といふ事を申添へておく。

